

## ①西洋の衝撃

- ◎「アジアという概念はヨーロッパの反対概念として生まれたものであり、したがって、その実態は西欧列強への対抗にほかならないということである。つまり西欧列強が進出してくるまではアジアなどというものは存在しなかったのだ」（高坂、181-182）  
→アジアという概念の登場＝西洋の衝撃

### (1) 東アジアにおける国際秩序

- 朝貢冊封関係（中国と周辺諸国）
- 中華帝国秩序（中国が周辺諸国と比較して大国・文化的な卓越）  
→中国に対する小国意識・後進国意識（北岡、2011、16 頁）
- 徳川時代の日中関係；文化摂取はあるが、日本による朝貢はなし（佐藤、1992 年、9 頁）
- **アヘン戦争**；列強の脅威、西洋への関心（佐藤、1992、22 頁）  
＝イギリスが持ち込むアヘンが禁止しようとして発生（川島・服部編、9 頁）
- ①西洋への警戒心；鎖国論？；隔離主義  
→「戦国乱世」とのアナロジー（佐藤、1992、24 頁、27 頁）

### ②西洋への対抗心；開国論；膨張主義（海外進出）

- 日本の対外態度の変化（佐藤、1992、25 頁）

### (2) 「ヘロデ主義」と「ゼロト主義」…トインビーの提起（『歴史の研究』）

—ある文明が有力な外部文明から挑戦を受けた時、どう対応するだろうか。  
（古代ユダヤを例に）

- 「ヘロデ主義」
  - ◆ ヘロデ王はローマ軍への物理的抵抗がユダヤの民族的悲劇に帰結することを洞察。ユダヤの国を開いてローマからの支配を受忍するが、ローマ最高権力の下で自ら王に留まり、間接統治に食い止めた。
  - ◆ 強大な外部文明の力を内側から学び取る。  
（トインビーは日露戦争で勝利した日本をその成功例として挙げた）
- 「ゼロト主義」
  - ◆ 熱狂派。強力な民族的プライドに動かされて、勝ち目のない徹底抗戦に走り、集団自決

- ◆ 理知的なコントロールが欠如、自己破滅の極限まで突き進む。  
(近代日本の攘夷派や第二次世界大戦における日本の「玉砕」)

[五百旗頭、2-3 頁]

### (3) 「開国」「蒸気船」「海防」

- アメリカの開国要求→「蒸気船ショック」(科学技術力と軍事力の象徴)

(園田、52・59 頁)

- 「海防」の必要性

→海防のための洋式武器の使用法をマスターするのと並んで、これらを修理し、製造するための科学技術・自然科学の「欧化」(非軍事的なもの)が必要。(園田、101 頁)

→大船建造の解禁。分散的な軍事力の集積から「統一」軍事組織の形成へ。

(封建制の克服)

(園田、112-114 頁)

### (4) 西洋と東洋

- 平安時代；「唐才」(学問的知識を意味)との対比から「大和魂」(現実の生活の処理能力を意味)という言葉が用いられる。

- 室町時代；「和魂漢才」(人間的能力のあるべき組み合わせ) (佐藤、1992、11 頁)

- 「和魂漢才」から「和魂洋才」へ；日本にとっての文化的先進国の移行

(佐藤、34-35 頁)

- 帰属感；東洋は西洋からの圧迫を受けているという意味において運命共同体。

団結、**同盟**の必要性

(佐藤、1992、37 頁)

- ◆ 公爵 近衛篤磨の「同人種同盟附支那問題研究の必要」

『太陽』第四卷第一号 明治 31 年 1 月 1 日発行

「東洋の前途は、終に人種戦争の舞臺たるを免かれじ。黄白兩人種の競争にして、此競争の下には、支那人も、日本人も、共に白人種の仇敵として認めらるゝの地位に立たむ。」

「日清戦争に於ける日本人の技倆を見て、俄かに黄人種の侮り難きを悟り。」

「黄人種は物質的文明に於て、固より歐洲列国の後に落ちたること遠し。此點に於て今日歐洲列強と競争するに足らざる無論なりと雖も、体力の強弱、能力の優劣に至ては、未だ容易に斷定す可からざるものなきに非ず。」

「同人種保護」「同盟」

「支那問題を研究するに在り」

「支那に遊びて支那の事情に通ずるものは甚だ少なし。」

- ◆ 「即亜」＝西洋列強に対する東亜諸民族の協力を説く。「アジアの開放」  
一帝国主義的進出 (高坂、181 頁)

- 劣等感？；西洋諸国を表す用語 「異国」「西洋諸国」 ×「夷狄」 (佐藤、27 頁)  
※日本も朝鮮も中国と同様に華夷思想（複数の「華」）、「海禁」(川島・服部編、6 頁)

- ◆ 福沢諭吉の「脱亜論」  
→西洋の文明を取り入れなければ、国の独立を保つことはできない。  
「我国は隣国の解明を待て共にし、其支那朝鮮に接するの法も隣国なるが故にとて特別の会釈に及ばず、正に西洋人が之に接するの風に從て処分すべきのみ」  
(『時事新報』)  
⇔当時の世界の力の不均衡とその原因を正しくとらえているか。やむをえない方法としての「脱亜論」？(日本の立場の困難性) (高坂、124 頁)

- 日本は西洋？東洋？  
「日本は西洋でも東洋でもない」 (高坂、177 頁)  
→二重の意味での「辺境」；①東アジア秩序における「辺境」②西洋＝「中央」⇔東洋＝「辺境」

##### (5) 「アジアからの衝撃」

- 「西洋の衝撃」→東アジア情勢の転換点？ 黒船・アヘン戦争  
① 朝貢・冊封・互市といった対外関係の維持  
朝貢：中国皇帝に対し、臣服の意思（貢物）→交易  
冊封：中国に国王としての称号を求める。（称号授与文書や印璽、曆を受け取る。）  
互市：朝貢や冊封を伴わない交易  
(ex 西洋諸国との貿易は 1757 年以降、広州一港にて) (川島・服部編、6-7 頁)  
ただし、植民地化による朝貢・冊封の対象が減少 (川島・服部編、21 頁)  
ビルマ（英）、ヴェトナム（仏）などの東南アジア諸国（シャムは除く）  
② 朝貢・冊封以外の対外関係 (川島・服部編、12 頁)  
アロー戦争（対英仏米露）中、天津条約（1856）しかし不履行  
北京条約（1860）

→北京での公使館設置、総理各国事務衙門の設置。清朝中央を相手とした通交  
≠朝貢・冊封

③ 南京条約（アヘン戦争後）、日米修好通商条約 （川島・服部編、13－14 頁）

→開港（どちらも 5 港）、居留地・領事館

「アジアからの衝撃」；「開港」により日本産品が中国市場へ多く流入。

これまで長崎を通じて海外へ出していた輸出品（蝦夷の俵物など）

箱館から中国商人によって運び出される。

#### (6) 「日本」の形成

- 中華思想と結びついた儒教の受容⇒尊王論や国学の発達に寄与 （佐藤、1992、12 頁）
- 朝廷、幕府、藩による多元的政治システム；国としての統合性の欠如
- 「正統性の根拠については朝鮮に依存し、また統治を大幅に各藩に委ねていた。」  
（佐藤、1992、65 頁）→天皇の血縁の連続性 （北岡、2011、16 頁）  
「皇統」の連続＝自国優越の根拠 「支那」意識 （渡辺、314 頁）
- 小国意識を補填する「日本」論としての「東の国」「陽の国」（渡辺、308 頁）  
「東方であることを、太陽・天皇と関連させることによって、一気に日本を『万国』  
の『元首』としたのである。」 （渡辺、309 頁）

#### 参考文献

五百旗頭真『戦後日本外交史』有斐閣アルマ、2014 年  
川島真・服部龍二編『東アジア国際政治史』名古屋大学出版会、2007 年  
北岡伸一『日本政治史—外交と権力』有斐閣、2011 年  
高坂正堯「海洋国家日本の構想」（『海洋国家日本の構想』中公クラシックス、2008 年に所収）  
同 「中国問題とはなにか」（『海洋国家日本の構想』中公クラシックス）  
（レジュメでは、両方とも中公クラシックスの頁数で表記している。）  
佐藤誠三郎『「死の跳躍」を越えて—西洋の衝撃と日本—』都市出版、1992 年  
園田英弘『西洋化の構造—黒船・武士・国家』思文閣出版、1993 年  
渡辺浩（2010）『日本政治思想史—十七～十九世紀』東京大学出版会

#### 史料

近衛篤磨「同人種同盟附支那問題研究の必要」『太陽』第四卷第一号 明治 31 年 1 月 1 日  
発行